

懇談会「国土計画考」 - その19 -

出席：今野修平氏・国土計画研究会メンバー

日時：平成19年9月20日（木）

場所：ホテルプレジデント青山「ファンクションルーム」

今野 今日は、私から皆様方にご提供したい資料が幾つかあります。一つは地図です。

本題ではないので簡単に説明だけしておきますと、人口問題研究所で推計した2030年の将来人口を、平成12年の国勢調査を100とした場合に、ひと目でわかるように、市町村に下ろして図化したものです。頭を使ったものではないですが、パッと見ますと、東北新幹線沿線は盛岡まで黄色が帯状になっていますから、すごいなあと思いますね。少なくとも2030年まで人口が減らないところは黄色です。山陽新幹線のほうが元気がないのがちょっと気がかりで、姫路から先は広島だけなんです。あとは福岡、札幌というのが大きいかたまりです。

A氏 高松がダメですね。

B氏 自動車産業のあるところが光っていますね。

今野 これはいろいろな解釈ができると思いますね。いかがでしょうか。

A氏 これはコーホートですか。社会変動は入れているのですか。

今野 そうです。人口問題研究所が将来推計をやったもの、そのままです。数値はいじくっていません。

A氏 趨勢型ですね。

今野 そうです。趨勢型だから、社会変動を入れてないと言うのも正しくないけれども、これから新しい社会移動がどう起きるかというのは入れていません。

A氏 太平洋ベルトがちょっと東に寄って、今野先生のご出身のほうを突き抜けて盛岡のほうまで抜けている。

今野 同時に、札幌広域圏が三大都市圏とともに大きくなっています。

A氏 中国、四国は、全体的に少し暗い色ですね。

今野 それをさらに細かく見たのが、市町村別の人口推計です。北東北と関東、山梨、首都圏を見てみますと、こうなります。これはそれだけのことです。何かにお使いくださって結構です。

B氏 本当に一点集中で周辺がどんどん減っているというのは、北海道なんか全くそうですね。

今野 必要な公共投資とは何かという問題意識で、きょう皆さん方にお配りしたのは、7月に、『新版日本港湾史』というのを日本港湾協会が何年掛かりかで編集しました。港湾史刊行委員会の副委員長をやらされまして、病院に入っていたときからですから、もう数年になるわけですが、やっと出ました。その中で、戦後日本の港湾開発の総括を書けというので、原稿用紙100枚ちょっと書いたのを、別刷としてお配りしました。

独断と偏見のところだけをご紹介しておきますと、一つは、港湾開発というのは、釣り堀までつくったなんていうほど無駄な公共事業として見られていますが、本当にそんな無駄な投資だったのかということ。それから、港湾を開発することによってどのように歴史を変えたか。日本がこのような港湾開発をす

ることによって人類の歴史をどう変えたかという、いままで誰も言ってくれたことのなかったことを言ったのと、陰では、やはりインフラ整備をすれば経済を引きずる力は強くなるのではないかということの筋を通したつもりでございます。

ただ、それを私の名前だけで言ったのではまさしく独断と偏見になるので、アルフレッド・ウェーバーの「工業立地論」を背景にしながら説明しました。ウェーバーの工業立地論というのは、ひと言で言うと、「工場という生産拠点の成立は、ひとえにトータル輸送費を極小にする地点が最適である」という理論でございます。アルフレッド・ウェーバーというのはマックス・ウェーバーの弟です。

その理論を適用して、戦後の日本の港湾開発は行われてきたのだと言いましたが、その言い切ったところは嘘でございます。いままで日本の港湾官僚に何万人の官僚が従事したかわかりませんが、そういう意識で政策を立てたのではなかったことだけは、正直、言えると思います。流れに応じてやっていただけのことで、私が勝手に屁理屈をつけたということでございます。

その結果、今日、工業発展の段階では最も初歩的な高炉製鉄所が、いまだに国際競争力を強く持って世界に君臨している。今回の景気回復の原動力の自動車工業とともに、二番目の基盤になって外貨を稼いでいる。しかも、注文に応じ切れないでいるのも、そういう理論をきっちり踏まえたからであろう、こういうことを言いました。

最大の歴史的評価は、一つは、こうした形で戦争をなくすことに寄与した点です。第二次世界大戦までの歴史を振り返りますと、帝国主義というのは資源争奪戦だった。しかし、一番資源のない日本がそれによって重工業をつくれたというのは、一時は、アルフレッド・ウェーバーの理論から見ると戸惑った - - 資源のないところに工業ができると。それは実は交通経済の裏を使ったのですが、資源がないところでも工業はつくれる、したがって近代化はできる、ということを経済発展途上国に教えた。その結果がマハティールの「ルック・イースト」政策に結びついて、日本に次いでそれをマネてつくったのは、韓国であり

台湾である。

現実に韓国や台湾の時代には、工業港の絵を、時の運輸省港湾局が中心になって仕事を進めて、我々の年代の者は、補佐官時代にはみんな手伝っています。私は具体的には高雄の工業地帯の絵を、どこを浚渫して、どこから土を採って、どういう工業用地を用意しろということを書きました。いまでは、当時の港湾局長がODAで台湾に行ったときにそのデータで講義をさせて、それをもとにして高雄の臨海工業地帯ができたという形で、手伝った過去があります。それからさらにシンガポールへ波及して、香港に波及して、中国に飛び火していったわけです。

A氏 高雄の話はいつ頃ですか。

今野 私が港湾局にいたときですから、昭和44～49年です。もう30年以上昔です。日中は仕事が忙しくてそんなことはやってもらえませんものですから、夜にやりました。

A氏 高雄の港は、昭和50年代に非常に整備されて強かったですね。ただ、その後、相対的に弱くなってきたような印象がありますがどうですか。

今野 いや、いまは世界のコンテナ取扱量が第4位くらいですよ。

B氏 ものすごく高いよ。逆に言えば、重工業が立地したという状況といまの物流とは違う形で動いている。

今野 でも、基盤としては、大型船で同じ港湾を使えるというので使っています。だから、台湾の経済成長を港湾側から見ますと、高雄で支えて基隆は捨てたという形です。私も行ってみましたが、基隆というのは天然の良港で水路と用地が狭いんです。大型船を入れられないので、あそこを捨てた。高雄で

足りなくなってきた分は、いま台中が伸びてきて、台中から高雄まで続くみたいな形になっています。それが、新幹線まで引っ張り出してくるということになりました。したがって、台南もそういう工業開発が相当進んでいます。

そういういきさつがありますから、したがって、途上国を豊かにする、貧しいところからの解放ということに日本の港湾開発はうんと寄与した。国土政策は屁理屈だけ言っていたけれども（笑）、港湾政策は世界を救った - - こういう評価があり得るのではないかということを書きましたが、残念ながら、こういうことを書きましても、わが港湾屋の集団では分野が異なるため読みこなせる人は、なかなかいない。

そこで、ぜひ、いつの時点にか議論して、ご批判とご教導をいただきたいということでございます。これは以上です。

A氏 正直言って、私はウェーバーの立地論というのはもう過去のものだと思っていたのですが。

今野 学者はみんなそう言っています。ただ、「やっぱり生きていた」と、僕は思っています。それから、その後、（アウグスト）レッシュとか、学者としての立地論はいっぱい出てきているのです。だから大学の講義では、「ウェーバーなんか古い、レッシュだ」と言っている人もいます。

だけど、僕に言わせると、本もとの「輸送費を極小にするところが適正な立地点」というのだけはレッシュも何もつながっていると思います。だから、ここでは原点のウェーバーを立てたのです。

A氏 （ポール）クルーグマンがやはり立地論を言っていますね。私も、なかなか難しく理解していませんが。

今野 私は実は昭和40年代の半ば、運輸省港湾局計画課、それから臨海工業地帯の開発課というところにおいて、課長輔佐をやって、課長補佐行政の中心

で仕事をやっていましたが、血と汗を本当に流していたのは君津の製鉄所の計画です。

当時、一全総の新産都市を受けて、工業というのは基盤をそろえなくてはダメだ、基盤は鉄で川上産業の種播きが総合的工業地帯にする基礎だと議論されてましたが、それをまともに受けて仕事をしていて、君津の製鉄所の計画でも、工場敷地の絵を実は私も直接加わって描いたのです。そういう勉強をする機会があり外でやっていた作業なんです。

それをベースにして、国土庁に行ってかなり自由に動けるようになってから、ヨーロッパの製鉄所を軒並み見たわけです。それを見て、「なるほど、ウェーバーの理論は説得力がある」ということを痛感させられました。

君津は地球の端につくった製鉄所だけど、世界市場に対して、ヨーロッパには一切負けないと思いました。ダンケルク（仏）のユジノールにも負けないし、西独のデュイスブルクにも負ける要因はないと思ひまして、それ以来、それを信じています。素材工業の立地 - - 正確に言えば素材工業の立地論であって、ハイテクのように、厚さ0.1ミリのミクロな部品をつくるとかいう立地論に適應するかどうかというところは、私も勉強不足であることは真っ正直にド口を吐いておきます。

A氏 戦後の日本の電力、石炭、海運、鉄鋼というのは、石炭を石油に入れかえると、いまだに私はものすごく意味があると思うのです。鉄鋼というのは決して古いものではなくて、いま自動車産業のベースも鉄鋼だし、日本の経済成長の中にきちとした形で位置づけられると思います。

ただ、最近、経済企画庁の出身ですか、原田泰さんが『日本国の原則』というのを書かれていて、あれを読むと、傾斜産業について批判しておられるんですね。全体的に批判しておられるのですが、ただ、あの四大産業というのはいまだに生きているんじゃないですかね。

B氏 五十年から百年単位で歴史を振り返ったときに、それがどういう役

割をしたかというのは、まさにいまの港湾の議論じゃないけど、ヨーロッパの鉄鋼業はどうだったか、それから、これからの鉄鋼業はどうなるかという問題で、かつては厚板が中心みたいな生産だったでしょう。いまはそうではない形で移り変わってきていて、だんだん技術傾斜していくにしたがって、例えば、いま言われた千葉の製鉄所だって、いつやめようかという議論さえ一部には出てきているわけです。

今野 千葉の旧川鉄時代と君津時代とでは製鉄所の主要生産品目が全く違って、川鉄は主要マーケットが造船所ですから厚板主体。住金の和歌山はパイプ主体。そして君津はどうかというと、初めての自動車用薄板生産です。

したがって、私があそこの埋め立てと港湾の絵を描いたというのも、鉄鉱石の輸入から最終製品は薄板のコイルがそのままアメリカ輸出用の埠頭に行く、その流れを港湾計画の中にはめ込んでいったということでありまして、もう一言だけ言いますと、それを教え込んでくれたのが都市化研究公室の吉田達男さんです。

B氏 傾斜生産の評価の問題でも、その時代に何をという見方で考えないといけない。例えば傾斜生産、あのときは石炭だの何だの、そういうのは既になくなっているわけでしょう。それから、いまは石油の立地そのものでさえ変わりつつあるし、これから電力がどうなるかの問題では、その評価がまた大きく変わってくる可能性があります。それ抜きにして、つながらないという議論をする学者もちょっとおかしいような気がしますけどね。

今野 しかし、もう30年前にやったことは、いまの学者連中は、学会に行っても知っている人は誰もいませんから。それを前提にして考えてくれていますから、暴論以外の何ものでもないのですが。

A氏 昔は工場というのは資源立地だったわけですね。そこで資源をにら

んで争う。そこに帝国主義戦争が起こってきたかもしれないけれども、そうではなくて、立地条件が変わってきたのでむしろ戦争から離脱してきたという考え方は、確かに面白いですね。

そうすると、日本の港湾がメキシコに結構、技術供与をしていましたね。あれはどういう意味が考えられますか。

今野 メキシコの港湾開発援助というのは僕はよくわからないので、的外れかもしれませんが、一つは、あの当時、ある種のずるさが日本にありました。それは何かというと、商事会社を中心にして全世界の鉱山にみんな唾つけていったんです。それをいかに日本に運ぶかということのための港湾開発。これに対してJICAのカネを使ってつくっていったということが一つです。そのためにインドのゴアだとか、ブラジルとか、そういうことで港湾開発を随分やらされました。

B氏 ブラジルはそうだけど、メキシコというのは何ですか。

今野 記憶がぼけていますが、メキシコも鉄鉱石の積み出しだったのでと思います、背後にあったのは。

A氏 当時は原油が随分騒がれていたんじゃないですか。

今野 メキシコ湾岸は海底油田なんです。将来への期待で、いまのサハリンと似たような議論でした。

もう一つは、地政学的に見た場合のメキシコの港湾の必要性というのがあります。海が太平洋岸と大西洋岸で分かれています。私が当時、外務省に向ってコスタリカに行って港湾計画を立てたのも、全くそれなんです。大西洋岸の港ばかりが流行っていたんです。それはヨーロッパ、アメリカ東岸に近いから。

ところが、アメリカ西岸が経済力をつけてきた、日本も成長してきた、太平洋岸に港がない、太平洋岸にないと国際市場に乗れない、それで港をつくってくれ、こういう要望が来て、港をつくってくれないなら、貿易の不均衡さがこんなにあるから、対日外交は絶交するぞと脅かされて僕は行ったわけです。それは中米の地政学的な宿命ですね。

南米に行くと、兩岸にまたがった国というのはいないんです。大西洋岸か太平洋岸だから、そういうことは起きない。しかも悪いことに、メキシコもコスタリカも同じですが、人が住んでいて、経済の中心が真ん中の涼しい尾根地帯にあるんです。

A氏 高いところにいるんですね。

今野 そうです。ご承知のようにメキシコシティの標高は2,200メートルでしょう。私のいたコスタリカは1,250メートル。そうじゃないと暑くて生活できないわけです。そういう背景が強くあったのではないかと思います。メキシコ自体は私は手伝っていませんので、詳しいことはよくわかりませんが。

それから、お配りしました『交通新聞』に書いた社説の「地域格差」というのは、これだけ緩い成長で景気を回復してきたというのは、緩い成長のときには波及効果が鈍るのが経済の鉄則。したがって地方や中小企業になかなか行かない。それを、東京と名古屋だけ景気がよくて俺のところは大変だと言っているのは、時間軸上のズレを全く同一にしてやっている理論ではないのか。そこから出てきた地域格差論であることは否定できないのではないかと、というようなことを言っておきました。

それから、景気がよくなるときは常に、国民経済を支える中心産業が立地しているところがよくて、それ以外の付随的なところはマイナスになる。マイナスというか、相対的に遅れてくるわけです。景気が悪くなると、主体の工業地域、都市地域が悪くて、遅れた地域が相対的によくなる、したがって人口の流れも逆になる。

ただし、もう一つ、景気がよくなって、国民経済をよくしていった後、稼いだカネの所得再配分システムを事前に、しかも十分に検討していないのではないかとすることで、経済計画がなくなったことや国土政策が弱くなっていることに対して、不満をちょっと述べているというのがこの社説でございます。

A氏 確かに景気が上昇しているときに、そのときの中心産業の都市が発展する。いま、それは何かというとサービス業ですね。サービス業というのは一極集中の傾向を持つから、「Economy of scale」を持つわけですね。そうすると、やはり東京がよくなる。

これは理論として正しいと思いますが、例えば昭和30年代後半から40年代にかけての景気上昇局面では、そのときのリーディング・インダストリーは加工組立型産業です。だから、その立地点である地方都市がよかった、したがって人口が地方に分散していった、そういうふうを考えてよろしいのですか。

今野 そのところは議論の余地があると思います。というのは、工業を中心とした社会から三次産業へというパラダイム・シフトが起きました。そのパラダイム・シフトをどう組み込むかということが一つ。

それから、現在の経済構造の中で、国内経済的に見るとサービス産業が牛耳っているけれども、グローバル経済的に言うと自動車産業と鉄鋼がカネを稼いでいる。もちろん細かに見ると、貿易収支より資本収支のほうが次第に大きくなってきているとか、就労の場は三次産業だけになってきているとかいうことはあるけれども、この景気回復は何が担いでくれたかということ、自動車産業と鉄鋼は無視できない。自動車と鉄鋼が無視できないということを前提にして、これを書いたということはありません。

ただし、基本は同じで、集積のメカニズムが働いた。いまのリーディング産業自体にも、それから三次産業にも集積のメカニズムが働いている。これは同じだから、ある線までは同一に論じていいと思います。

A氏 いまは第三次産業時代でサービス経済化ですね。サービス経済化時代に対応した国土政策というのはいまだにできていないと私は理解していますが、けれども、この前、下河辺さんにちょっとお伺いしたときに、それについては、自分としてはやり残したといえますか、やったという意識はない、という感じだったと思うのです。

今野 下河辺、吉田達男、今野修平までが最後だと思いますけれども、これは工業化時代の人間ですよ。

A氏 サービス経済化に対応した国土計画というのはいり得るのですか。

今野 そのこのところは個人的にも、サービス産業なんていうのは金魚の糞だと思っていますから、本音は（笑）。同じサービス産業でも、特に雇用の面から見て、サービス産業の雇用を圧倒的につかんでいる、本来の小さい定義のサービス産業（都市サービス産業）、あれは全く金魚の糞で、従属産業で、カネの回りから言っても三次サイクル、四次サイクルあたりでよくなる話であるし、収入源も個人個人の末端消費を吸い上げている産業だと思います。

ただ、頭脳産業は工業にもものすごい基盤になっているし、サービス提供にもなってくる。三次産業論の中では、これが稼いでいるカネに注目しなくてはならない。それこそが三次産業の中の中心産業ではないか、こんなふうに思っているわけです。だから、第二の島津製作所、第三の島津製作所で一人がノーベル賞でどれだけ稼ぐか、それから世界的には金融業の跋扈が問題です。こういうことは非常に大事な話ですね。

A氏 サービス経済というのはやはり「花見酒の経済」であって、付加価値は生み出していないというのが、たぶん私たちの年代まで……。

B氏 僕みたいな年寄りから見ても、その考え方は間違っていると思うよ。

いまの情報化社会そのものがグローバル化した段階で、そこでの知恵の競争みたいなものが、金融から何からすべてに見え始めていて、それがかなり主体的な形になっている。だから逆に言えば、情報関連の通信なり何なり、いろいろなことを議論されているのは、それが今度は社会資本化されるということだよな。社会資本になっているということでしょう。それを抜きにして自動車産業も成り立たないんですよ。

A氏 そうすると、サービス経済を組み込んだ国土計画というのはあり得ますか。

今野 あり得るでしょう。国土計画で国土が再編されつつあって、いま、その新しい国土の形に猛烈に舞台が回っていると思います。それはひと言で言えば「ネットワーク社会」です。「空間資源の上に成り立っている国土計画から、ネットワーク型国土計画へ」という動きだと思います。

B氏 ケータイの普及なんかは、時系列にマップをつくって見れば、地方に展開していったというのがものすごく出ている。僕が96年に信濃町に行ったときには、PHSなら使えるというので持って行ったら、別荘のあたりは全然ダメ。あの頃は幹線の中核都市しか使えなかったわけです。

A氏 前に下河辺さんのところに行って、情報化に対応して、どういう形で国土計画を考えられましたかといったときに、四全総のときはそこがどうしても解決できなくて、実は五全総のときにそれを考えた。でも、十分な答えがなかったというふうに私は理解しているんです。真っ向からサービス経済化、情報化に対応した国土計画というのは考えられるんですかね。

今野 考えられると思いますよ。三全総、四全総、あるいは、僕がかかわった新全総なんていうのは、徹底的な工業化をベースにした国土計画論でした

ね。それは置きかえてみると、生産基盤強化国土計画なんです。だから、マルクス経済学しか教わってこなかった私でもこなせたのかもしれない。

ところが、流通とか、さらにその先の一般消費、つまり「市場」ですよ。市場論になるとマルクス経済学では答えが出ないでしょう。そこにまだ完全に踏み込んでいないわけです。ケインズなんていうのは生産基盤強化政策論ですね。それから半歩踏み出した話です。

だけど、都市経済論、ネットワーク経済論、市場経済論、需要先導型経済論となると、国土計画としてはネットワーク論ですから、東海道メガロポリスと札幌広福を、どう計画の前提に置くかということに置きかわってくるのではないかと思います。私たちがやっていた生産力基盤強化国土計画論のときは瀬戸内海ですよ、鉱山のない日本では。それは当時は決して間違っていなかったと思います。だけど、いまは札幌広福、三大都市圏です。東海道メガロポリス、プラス札幌広福ですよ。それとどうネットワークを組むか、二全総の主軸形成論は本当に先をみた計画だった、そこが本道になるのではないかと考えております。

B氏 三次産業は何かというと、結局、質の高い人間を供給できる基盤にしか発生しない。人間の供給をどういうふうにするか、というところに社会資本は移ってくるだろうと思うんです。だから、大学のあり方も競争が起きて、つぶれるのがたくさん出てくると思いますね。

今野 私は20年以上、非常勤講師をやった駒澤大学に通ったけれども、あそこが、何の大したこともやらないのにレベルがどんどん上がってきている。何のせいかといったら、渋谷のせいですね。渋谷というのは日本で一番若い女の子が歩いている街で、大学に行くのに渋谷を通らないと行けない。渋谷の駅で乗り換える、渋谷の街を歩く。それにひかれて地方から皆来るんです。それは心理学の上では「錯覚の恋」というんです。

錯覚の恋というのは心理学の学術用語です。錯覚の恋に陥って、青学、駒澤、

このレベルが上がっている。そして、本庄に出た早稲田がガクンと落ちた。それでみんな気がついて、都心に高いビルを立てて、大学院だけでもとか、駅前サテライトをつくって対応するようになった。大学立地までそういうふうになっているわけです。

A氏 地域格差なのか所得格差なのか、サービス経済化というのは人間の能力を高めるとすると、工業化時代に比べると、全世界共通ですが、格差が広がっていますね。人間の能力がある程度バンドが狭かったのが、広がってきている。アメリカなんか典型ですね、その情報格差というか。

これは、経済構造の変化に伴う必然の動きなんですか。

今野 そうです。逆に言えば、政策としてはそれを前提にして、再配分をどうするか、あるいは社会保障をどうするか、という議論がきちりされなくてはならない。先手、先手で。

B氏 再配分の問題は、国が最低の水準についてどう対応するかという問題で、格差というのは、それぞれの産業間なり地域間なり、むしろ競争を生む一つの要素で、積極強化をしたほうがいいと思うんです。いま、何か被害を受けているような話ばかりでしょう。

今野 格差ゼロにすれば社会主義ですからね。ただ、最低水準をどこまで社会が保障するかという話ですよ。

B氏 例えばシャッターがおりているから、この町を何とかするって、政治でどういうふうにするんですかね。

A氏 いまの格差是正の議論というのはちょっと危ないですね。みんながみんな、それに対して何も異を唱えないで、そうだ、そうだという話ばかりに

なる。

C氏 でも、格差論というのは必ず出るんですね、競争社会が進化してくると。

A氏 ゴー・アンド・ストップで必ず言うんだけど、それにしても日本の場合は……。

C氏 格差論だって、結局、どういう単位で見るかということだと思いのです。細かいところまで言ってしまえば、どんなふうにしたって格差は出るんですよね。その容認の仕方が、道州制の議論とか、市町村合併とか、ああいう形で単位を大きくしていけば、その中で格差というのは見えなくなるものじゃないですか。いや、だからいいということではないですよ。ただ、あまり細かい単位（要素）で格差を議論しても、意味がないのではないかと。

A氏 例えばヨーロッパなんかで格差是正のときに第1番目に出てくるのは、下のほうを底上げする「教育」でしょう。日本の場合、公共事業にストレートに行く。

C氏 それは、政策として公共事業しかないのではないかという無策さぶりが、そういうことになるんです。

B氏 カネをばらまく手段として、公共事業が言われているところは間違いだと思ふ。もっと積極的な公共事業の役割を考えなくてはいけない。

今野 100%賛成だけれど、言葉遣いとしては、「ばらまく」ではなくて、もっと正当な意味での所得再配分を政策としてしっかり持たなくてはいけないと思っているので、ここでもわざわざ漢字で「所得再配分」と書いておいたん

です。

A氏 例えば鳥取、島根を見ていると、地方の政治というのは地方の建設業者が議長とか何とかになっているから、こういう時代は、特に自民党の予備選挙なんてやると、みんなそういう人たちが声を出していますね。

今野 しかし、建設業を通して稼いだカネを貧しいところに配ってやるというのは、非常に単純で投資というより社会福祉だから、効果が速いですね。それから人件費比率は高いから、すぐに浸透していくので、そういう意味では、効くか効かないかわからない薬を飲んでいるよりの確ですよね。

B氏 農業も林業も、産業としてどういうふうに育成するかという話ではなくて、農業、土木を通じて地域にカネをどうばらまくかという話だから。

今野 逆に言えば、政治家が食いつきやすいところでもあるんですよね。インフラの犠牲というのは、それをまともに受けてしまっている犠牲だと思っています。

D氏 いまの形だと、議員さんが働く場がないんじゃないですか。口をきく場所がない。それが一番困っていて、議員さんが声が大きいと。

今野 本来であれば、こういう議論をするために議員を選ぶわけですが、それをしていないわけです。

A氏 よく解釈すれば、あれは総裁選挙までの現象であって、確かに福田さんの発言を聞いていても、公共事業を緩めるということは言ってないんですね。

C氏 むしろストック・・・というのは、フローの公共投資には頼らないということでもあると思うのです。

今野 だから、いまの日本の政治家のあり方というのは、論語を読むまでもなく間違っていますね。いよいよあの世に行くときは閻魔様に聞かれるそうだけど、「私の人生はろくな人生じゃなかったけど、政治家にならないというところだけは非常に誠実に生きた人間でございます」って、言おうと思っているんだけど（笑）。

B氏 （宍戸先生の原稿を提示して）これ、読みました？

今野 これは僕はまだ見てないなあ。この前に書いたのをわざわざ送ってくれて、読めとメモが書いてありました。

B氏 公共事業なり何とか基金をつくって、開銀みたいな機能に国としての選択的な投資を促進させると。それはいいけれど、じゃあ、それは何かということにはここではまだ触れていないのでね。それは皆さんにお考えいただくという話だと思うけれども、ただ、モデル的に言えば可能なことだし、いまの日本の蓄積というものはみんな海外に流れていって、株なり何なりああなっているけれども、それを国内に還流させる仕組みにもつながる・・・ということをお願いしたいと、一昨日会ったときに彼はそう話していました。

A氏 実は新全総と似ていて、この背景にプロジェクト論がありましてね。具体的にはナショナル・プロジェクトの考え方があります。例えば、海上にフロート型の風力発電1兆円プロジェクトとか何とか。風があるところに置いて、常にこう……。

今野 港湾は、日本の近代社会の中でフローティング施設の初代パイオニ

アですよ。

B氏 何をやったんですか。

今野 浮棧橋。昔はあれだけだったですから、フローティング施設。

B氏 不況になると鉄鋼業者もドックをつくったりするけどね。

今野 ただ、フローティング港湾というのは瀬戸内海、三大湾の港湾施設の中心でしたよ。瀬戸内海に行ったら全部フローティングです。

B氏 あれは、アメリカの石油政策のときに便利な手法で出てくるんじゃないですか。航空機の滑走路とか。

今野 あれはいまでも港湾の世界の中で光り輝いているので、フローティング空港なんていうのは検討課題になっているけれども、難点は何かということ、フローティングのほうではなくて、非常に精密になってきた電波誘導の飛行機との絡みなんです。多少揺れるので。

それで、関西空港でやはりフローティング論が出たときに、亡くなった木村先生が航空審議会の会長をやっていて、僕はホテルニュージャパンに呼ばれて、今野君に本当のことを話しておく、一番困るのは、電波誘導のときに失敗すると最大30センチの落差がある。30センチの落差が出たときにいまの飛行機の車輪で十分に耐えられる。耐えられるんだけど、足を折ると怖いから埋め立てに私は票を入れた。おまえ港湾屋だから、それだけは話しておくからと、聞かされたことがありましたけれども、いま、そこがフローティングの難点になっているわけです。

あとはメンテナンス問題です。腐食してきたときにどういう事態が起こるか。

E氏 中越の山の中にこのところ2年ぐらい行っていて、今野先生の大所高所ではなくて、現場の泥の中から考えた地域の問題がちょっと気になっていたものですので、何かのときにお読みくださればと思って、都市計画協会でその地域の特集をした冊子、2～3ページのものをつくりました。お時間があるときに読んでくださればと思って持ってきました。

今野 それでは今日は、「支配体制からの国家と自治拡大としての国家」という、国家論を少し話題提供することになっております。

まず学問的には、いま、「歴史学」の世界がものすごく舞台が動いているわけです。歴史というのは、人類発展過程の中での動かざる基本原則、時間軸から見た動かざる事実のように受けとめがちですから、失礼なことを言うと、講演したり何かするときには、歴史から説いていくと反論が出しづらいということがよくあります。

私の経験談から言いましても、日本共産党神戸支部総会に呼ばれたときに、イデオロギーの違う人に対してどういうふうに話を持っていくかというときに、困りました。私もある意味では嘘をついて、大学教授という肩書で行ったわけですが、それはなぜかという、神戸空港をつくるに当たって反対している日本共産党に対して、市役所が直接行ったのでは喧嘩になるから、神戸市長から「先生、ぜひ頼みます」と言われて、僕が神戸市の代わりに行った形になっています。

イデオロギーの全く違う人といくら話しても話にならないわけですので、歴史論から説いていったわけです。そうしたら、その中でわかった人がいまして、先生に質問があると挙手しました。何だといったら、「日本共産党が神戸空港や神戸港に反対しているのは歴史に反逆しているごとき言いざまだけど、そういう見解はけしからんではないか」と言うから、「いや、それは事実でございます」と言ったんですよ。で、交通の発達段階から、なぜ航空交通という厄介な交通を人間社会は受け入れなくてはならないかというのを説いていきました。

そのように、歴史絶対論である意味固まっていますから、イデオロギー論争すら乗り越えるのに歴史というのは使いがちなのですが、実はいままで、“神武・綏靖”から暗唱させられた私の年代は特にそうなのですが、あの歴史は統治論なんですね。支配者側の歴史なわけです。

A氏 歴史って常にそうでしょう。

今野 ええ。日本の歴史の大部分はそうなのです。それに対して、社会をつくっている基礎は民衆である。民衆であるがゆえに左翼イデオロギーとも結びついているのですが、色川大吉とか網野善彦という先生方が出てきて、新しい歴史論を展開し出した。それがあるところでものすごくチャンバラやったのが教科書問題だったわけです。

天皇制ができて、統一国家ができて、その影響は民衆一人ひとりにまであったわけですから、民衆の歴史だけで支配者階層ができ上がっていったわけではないので、そのところは卵とニワトリの関係で、両方ともが歴史なんだろうという点で、網野さんも一応、総論のところはそういうふうに書いていますよね。

そういうことなのですが、少なくとも国家ということを見ると、ヨーロッパではコミュニティがつくられる。ヨーロッパは狩猟経済でしたから、一族郎党が主体になって、狩りをするために集まってコミュニティができてきた。さらにそれが都市になり、そして地方自治を身につけること一千年、二千年を経て、近代科学の発展に応じた形で近代国家ができ上がってきたという形です。

地方自治時代にもっと大きな意味での軍事的支配権というのは、ヨーロッパでも近世は貴族社会であったし、それ以前は教会であった。我々がいま、イランやイラクの世界を見てもう一つわからないのは、ヨーロッパの歴史を標準史だと仮定すれば、あれがいわゆる古代から中世における統治システムです。選挙でいくら大統領を選んでも、大統領より宗派の親分のほうが偉いわけですから、その言うことを聞いている。中世的色彩が濃厚に残っている。

そういうことからようやく脱却したのが、ルネッサンスを経て近代革命だったと思います。そういう意味ではフランス革命のバスティーユ牢獄の襲撃というのは、歴史の上では非常に意義があって、そして近代国家が定着してくる。

ところが、日本ではそれがなかったがために、統治論だけで一貫した歴史が今日まで生きている。明治維新によって近代国家が生まれたと、形の上では近代国家になったけれども、日本の国家成立哲学は「統治論」だけで社会論、経済論がなかったのです。その統治者が大名から下級武士（薩長土肥）に代わっただけの話です。

ましてや、いまだに皇国史観や政治史だけが歴史というのは、非常に歪んだ形の歴史しか持っていない民族社会なのではないか、こんなふうに思います。私も大学に行ってよかったなと思えることは、随分歴史に興味を持って、大学で歴史の講義を聞いて、全部で30単位以上取っていると思いますが、例えば日本文化史とか、世界文化史とか、キリスト教史とか、そういうのを学びますと、日本の場合は、歴史の土壌というのが政治史オンリーになり過ぎているというふうに思うわけです。

この歪んだ歴史観の中に憲法の位置づけをすると、主権在民ということも堂々とうたった、形の上だけでは世界で最も進んでいる憲法ですが、「誰が統治に対する責任を取っているのか」というと、全くない社会になっている。こういう国家、社会であるといえる一面であるのではないのでしょうか。

冗談ではなく、この前、ある後輩と久しぶりで会いまして、2時間ばかり新橋のホテルでお茶を飲んで雑談したのですが、彼が厳しいことを私に対して言いましたね。「今野先輩は、国政の中核である国土計画に直接従事していて、各省にいろんな指示を出して、日本の将来はこの方向だなんてことを全国民に説くことを、自分の腕で書いてやっていたでしょう。だけど、それがそのとおり行かないで狂ってきたことに対して、先輩はどう責任を取るんですか」と言われたときは、一瞬、答えられなかった。私の罪なんかは大した話じゃないけど、政治家とか何とかを見ると、ほとんどみんな無責任ですね。

A氏 それは正論だけど、今野先生がお書きになったとおりに世の中が進んだら、これはまた大変なことになっていましたよ。

今野 しかし、責任が不明確な社会になっていること自体は、非常に困った国家、社会だと思いますね。

A氏 例の「中心市街地活性化」のときに僕も幾つかお手伝いをしていて、歴史をもう少し考えないと、ヨーロッパと日本との歴史の違いがあって、中心市街地の位置づけが違うでしょう。ヨーロッパの中心市街地というのは、一つは、城壁の中に住んでいたということがありますが、もう一つは、市民革命があって、市民革命の一つの砦ですね。必ずそこにプラザがあって、市民の人たちがみんなそこを守ろうというのが中心市街地になってきている。中心市街地をいろいろな形でみんなが大事にし、なおかつ、中心市街地にいる人たちはそれなりの負担をして、社会的責務を負うわけですね。

日本は市民革命がないわけで、しかも大体、市街地というのは、昔の城下町といっても町民の商業地域の跡ですよ。だから、日本の場合はいとも簡単に中心市街地は捨て去られやすいわけですね。

E氏 中心市街地を守っている人がいないんですね。文句を言っている人、例えばそこで商売している人は、実は郊外に住んでいるとか、要するに全く困っていないのです。

C氏 手放さないことが問題なんじゃないですか。シャッターを閉めるのだったら、売ってしまえばいいわけです。そうしたらもっと活性化するはずなんですよ。持ったままにしているから、活性化しないわけでしょう。

E氏 それは財産処分の問題もあるし。日本人は、どこに住んでもいいという、郷土意識がない時代が戦争を経たことによって起きたのではないでしょ

うか。イタリアなんか随分違いますよ。

今野 同時に、「市民」というのが成り立っていないから、市民個人個人が責任を取らないわけです。中心市街地のシャッターを閉めたのは、政治が悪い、行政が悪い、こういうふうになり、お客様（市民）がなぜなくなったのかということは消えるわけです。そこも無責任の逃げなんですよ。

A氏 明らかにヨーロッパの市街地の中心というのはパブリックスペースですから、私権というのは制限されますね。日本の場合、パブリックスペースかどうかは別として、そこには厳然たる私権があって、手放さない。しかも、シャッターを下ろすということは、ヨーロッパで言えば社会的責任も……。

C氏 置きっ放しにしている、醜いものを露呈させているわけですから。

A氏 シャッターという概念がないですね。皆さんウインドーショッピングだし、必ず店の中を見せる。やはりパブリックスペースですね。日本の場合、そういう勝手なことをやっている中心市街地を、なぜ行政が力を入れて「活性化」なんてワーワー言って、我々コンサルタントがそれをまた一生懸命手伝うのか。

E氏 さっきの公共事業のばらまきの一つですね（笑）。

B氏 日本は、先ほどの歴史論と同じで、百年の単位で考えたときに、支那事変が始まる頃から農業の人口はどんどん流出してきたわけでしょう。特に戦後、終戦のときだって、まだ一次産業の比率はかなり高かったのが……。

今野 疎開したために上がったこともあったけど、終戦直後は約50%でした。

B氏 逆に言うと人口の流動性というのが、市民社会をつくるほど地域ごとに独立的に定着するという仕組みを、日本は持っていないのではないかと。

今野 持っていませんね。

B氏 それは都市のあり方も全然違うのでね。いまはまさに、先ほどの地図みたいに、各地域一極集中みたいな形で、人間があれだけ減ったり、黄色いところが点になってしまうでしょう。ということは、そういう住まい方をしている。人間の流動はそういう形で行われている。郷土というものについての考え方がまさに違う。さらに言うと、戦後になって50年たってから、それがまた違う要因で都市に流出するようになったわけですね。

今野 頭だけでこんなことを言っているけれども、僕個人の生活を振り返っても、八王子市民なんて意識はあまり強くないで、村落共同体社会の宮城県亘理町なんです（笑）。

D氏 中心部が空洞化したというのは、2つあると思っています。1つは、制度的に都市計画法です。いわば線引きの問題なんですね。線引きできるところを、人口10万以上とか、三大都市圏であるとか、新産・工特とか、極めて限定的にした。それ以外のところは全く線引きなしですから、例えば私の経験で言うと、青森県の十和田市にしても、三沢市にしても、福井県の敦賀市、何のタグもはまっていないですから、ひたすら外に、自業自得がごとく滅びていくんですね。本当は三沢なんかやらなきゃダメなんですよ、新産・工特ですから。だけど、あそこはサボってやらずにここまで来た。法律違反をずっとやってきた。

それが一つと、さらに、線引きしてあるところでも実際には抜け道がたくさんあって、人口が伸びるという前提ですから、保留フレームというか、まだ拡大できる余地があるわけです。そうすると市街化区域を広げるわけです。政治

的な圧力とかそういうのがあるところに区画整理をやって、そこにでっかい団地をつくったり、場合によってはショッピングセンターが出てきたり、それをあたかも都市計画の中でやってしまう。

また開発許可ですが、都市計画法で厳密に言えばとても許可できないようなものを平気で許可をする。そういうことをやっているし、県の施設とか市の施設は別に許可は要らないということと、福井県で言えば、音楽堂みたいな公共施設が外にできて、市民もだいぶ反対したけど、県はそれをやってしまう。そういうことが各県・各都市で行われてきています。これを30年も続けていれば、こうなるのは当然なんですね。

もう一つは、町の中に必ず行かなければいけない施設がないんです - - と、私は思っているわけです。例えばヨーロッパで言えば、とにかく教会に行かなければいけないじゃないですか。町の中にシティホールもありますし、行く必要があるし、町の中にあるのが便利ですから、当然、コンパクトになっているわけです。

日本の場合も、せめて市役所ぐらいは町の中にあればいいのですが、市役所も結構郊外とかに出ているし、教会みたいなものはないし。昔は中心商店街がそうだったのですが、商店街もさびれてしまったので、人々が町の中にいる必然性、動機づけがなくなってしまった。

大体この2つなのではないかと思います。もしかしたら、2つ目は結果なのかもしれないですけどね。

今野 だから、結果としてプラザなき都市になっている。

E氏 いまおっしゃったのは、2つとも結果だと思うんですよ。僕は都市計画をずっとやってきて、都市計画は常に敗北。敗北、敗北と、前段はまさに敗北の歴史なんです。要するに、ずっと経済のしもべでしかなくてね。

今野 いや、都市計画だけじゃないです。港湾計画だって国土計画だって。

計画ではなくて政策と置きかえれば、政策というのは衆愚に対して常に負けていくんです。それでいいんですよ。

A氏 経済のしもべではないんですよ。僕らみたいな経済屋からすると、経済というのはずっと失敗していたわけです。そうすると、経済自体が一段下になって、経済が方向を見失ったわけです。ただ、最近また経済屋があらぬ形で前面に出てきたのでね。

今野 ただ、貧しい生活水準をずっと続けてきた衆愚にとっては、やはり経済のウエートは非常に高かった。それが生活水準が高くなって、私みたいな水呑百姓の孫でも牛肉を食べるようになってからは、経済のウエートが下がってきたのだと思いますよ。

A氏 ただ、さっきおっしゃったのは結果であって、原因というのは、市民革命の中で、みんなの共有するスペースをつくってこなかったという形。だから、そういう形が容認されたと思うんです。

E氏 線引きなんかするのだったら、そういう社会的なコンセンサスがあれば本当はやったと思うんです。だから、市民が求めなかったということですよ。

今野 政治とか、社会的意思という面での市民というのが、より高度化していくためには、市民生活の危機に直面する - - 敵に攻められるとか、男はみんな捕虜になって連れていかれてしまったとか、女はみんな強姦されたとか、そういう長い歴史の中でヨーロッパだって市民意識が出てきて、都市が出てきているわけです。

そこが日本の場合はなくて、日本の国家成立以来、国内で最大の戦争だった関ヶ原の戦のときには、重箱を持って酒飲んでいた農民が2万人見物していた

というんだからね（笑）。そこは基本的に素地がなかったわけですから、まあ、ある意味ではしょうがないんだね。それを前提にして、どう無駄なく、そういうところに到達できるかということこそが政策論として議論されるべきだと思います。

D氏 いまのお話は本当に致命的というか、本質的なハンディキャップで、基本的に拠って立っているものが全然違うんですね。

A氏 ヨーロッパのプラザというのは結構暗いですね。500年間、プラザでいろんな血が流されていますからね。

今野 それこそ戦争だけじゃなく、チフスで3分の1の人が死んだなんてね。

A氏 魔女狩りもやったし、裁判して公開死刑もやったし、みんなで500年間やってきて。

今野 血を流していますものね。

A氏 血と、もう一つはみんなの涙というか、喜びの固まりが入っているわけですね。

今野 そうですね。

B氏 都市計画の最初的时候は、ある程度開発区域を限定して、例えば、いまのスプロール化みたいな現象は抑えようという話だったのでしょう？

今野 結局、市民意識がないから、新住宅街が郊外にスプロールしようが、

都市計画区域が設定されようがされまいが、関係ないんですね。

D氏 実際には、調整区域に線引きされると売れないですから、開発できないので、その間に開発したり、施行時前に実際はかなりスプロールしたわけですね。そこは今野先生がおっしゃったように、日本人にそういう市民意識というのか、コミュニティ全体をとらえるというのは、現実的にはなかなか難しいのではないかとということかも知れませんね。

B氏 ヨーロッパは、都市と農業という地域区分が明確に分かれていますよ。

D氏 ええ。例えばイギリスの場合には、「都市・農村計画法」として法律が1本の体系になっているわけです。日本の場合には「都市計画法」と、都市計画だけなんですよ。

今野 日本に地名があるでしょう、青山なら青山、東京なら東京と。ヨーロッパやアメリカの社会は地名というのはコミュニティをあらわすわけです。コミュニティの名前なんです。ところが、日本の場合にはコミュニティがないものだから、行政体の名前なんです。そこが全然違う。だから、日本でつくられている世界地図は大嘘ついてるわけね。その嘘を上塗りしているのがいまの町村大合併論。ますます嘘をついているわけ。だから、聞いたことのない市が出てくるわけですよ、南砺市だとか。

D氏 最近、わからないですね。

B氏 全く歴史なんて考えられたことがない。

今野 話をもとに戻すと、もう一つ、日本の国家論を考えるときに根強く

残っているなあと思うのは「中華思想」です。中華思想の一番大きな基礎は「天下」です。その次に「国」なんです。天下を治めている人は「皇帝」で、国を治めている人は「王」なんです。その下に「国民」がいるわけです。

したがって足利幕府（足利義満）は、「日本国王」という名前で中国に手紙を送っているわけです。これに反発したのは聖徳太子で、「日出る処の天子」なんていうのも中華思想に対する反発なのです。

しかし、中国は一貫して今日まで……、中国だけではありませんね、日本より中国に近い朝鮮半島までが日本を遠い野蛮な国と見くびっているかというのは、金正日にあらわれているように、拉致問題も、とにかく貢ぎ物を持って来いということを言っているわけです。そうして行ったときには、ちびちびとそれに対して応えてお土産を持たせてくれるわけです。お土産の代表格が「曾我ひとみさん」だったわけでしょう。上の者がお土産をやるのは当たり前の話なんです。歴史学者が説くところによると、こちらが持っていった貢ぎ物以上に土産物をくれたともいわれています。琉球国なんかは、貢ぎ物を日本にも持ってくるし、中国にも持って行ったわけです。

天下があって国がある。国は王なんです。いわゆる任命制の知事ですよ。任命制の知事としての統治権を皇帝から認知された、こういう形でしょう。その国を、近代国家の国ということにつなげたわけです。ここはまた一つ間違ったかもしれないですね。「近代国家とは何か」というのを知らないで日本国にしてみましたから。

これは井上ひさしの分野になるけれども、明治初めの日本語がどういう形で誕生してきたかというところも絡んでいるわけです。「国」という言葉とか、都市の「市」という言葉とか、みんなそうです。ミナトなんて言葉がなかったから、「宀」に「巷」という字を新しくつくり出したわけです。

中華思想というのは、つまり、権力機構は天から与えられたものである。天与ですね。それなるが故に、下のほうへ行くと私権保持しか考えない。その結果、「公共」というのが抜けているという形になるわけです。公共的な社会寄与というのは何なのか、ということが全く不在なのです。アメリカでは例えば

「罪」といえば、懲役何年ではなくて、社会奉仕何日でしょう。そういうのは日本では定着しない。

私も最近、体のために毎朝散歩をしているのですが、ついでに、落ちている缶なんか拾っているんです。そうすると女房に怒られるわけです。乞食と見られるからやめなさい、みっともないと（笑）。全く公共不在社会ですね。

そういうところでの国家論というのは権力構造としてしか見ない。権力構造としてしか見ないから、いまの自民党対民主党になるわけです。対決だけしか考えない。権力にありつくとまた、甘い汁が吸えるからね。その辺は日本の国家論として考えるときに、国家それ自体をきっちりと理解しておかなくては、国家自体を磨き上げて、いい国家をつくり上げていくという努力につながっていかなくなる。国家の権力を持っている人ももちろんそうですが、国民一人ひとりの認識につながるところだと思って、国家論というのは、こういうことをきっちりと議論しておかないといけないのではないかと考えています。

実は「国土」という言葉も、国家との一蓮托生の中でつくられた言葉ですから、政策の対象の国土ということを考えるときに、国家論というのは抜き差しならない話だと思います。

A氏 国家論の議論が少なくなりましたね。

今野 それは、皇国史観に駆り立てられて、第二次世界大戦でえらい目に遭ったということの反動もありますね。国家のことを論じる人は票が集まらない。最もあれなのは、一般市民からすると、「国家とは何か」というのは全然わかっていないし、わかる必要もないでしょう。生活が安定していれば。

私は伯母の葬式のときに、1日休んで田舎に帰ったんですよ。そうしたら親戚じゅうが、「おお、珍しく来たな」ということになって、「いまどこに勤めてるんだ？」と言うから、国土庁に勤めていると言ったら、「国土庁ってどこの県庁や？」（笑）と聞かれましたよ。東京の永田町とか霞が関だから、「わが国土交通省」なんて威張っているけど、そんなの一般市民からしたら屁の役にも

立たない認識の社会なんですね。これが生きている。

A氏 欧米諸国は、国家というのを自分たちでつくって、こういうものだと一遍考えた時期がありますが、アメリカでいくと独立宣言、フランスでいくとフランス革命、ドイツでは恐らくワイマール憲法でしょうね。

今野 ルソーの「国家論」が出てきた背景なんて、ものすごく深いです。

A氏 日本は、明治維新はそれに当たらないと思いますが……。

今野 あれを維新と言って、革命と言わなかったところだけは偉いよ（笑）。わきまえて言ったのかなとも思っているんだけど。

B氏 やっぱり島国だからですよ。しかも、それまで鎖国されていた状態でしょう。ヨーロッパは同じような民族が住んでいて、みんな国境を接しているから、それを守るという仕組みをちゃんと認識していたのでしょうかね。

今野 そういう自然的な要因もありますね。日本は国境がない国だから。

A氏 中国は、どの段階が国家ができたかというのははっきりしませんね。

今野 ただ、中国という概念ができたのは統一国家ができたときです。中国という意識を植えたのは、歴史学の本を見ると秦の始皇帝です。それまでの空間は、統一国家という概念がなかった時代だと歴史学者は書いています。

A氏 ただ、その後に支配者が随分代わったときに、それは全部国家だったのかというと、そうじゃないですよ。

今野 そういう意味での中国という国家じゃないんです。だから、分裂しているときには皇帝を宣言してないです。皇帝を宣言した国は、その後、隋、漢、唐と来て、元、明、清となるんです。

B氏 国になったのは共産党になってから。

今野 いまの中国共産党ですよ。

B氏 そこまでは国民政府ともめていたのだから。

今野 いずれにしても、日本に大和朝廷ができるはるか前に秦の始皇帝が出てきて、中国という国家意識を植えたということですから、影響を受けるのは当然ですが、その影響は非常に深くあって、それを無批判に、十分に自らのことを考えないで、今日、そのまま「国」という形になって、国を背負って立って威張っているのが国会議員であったり、政府であるという形になっておさまっている。そういう認識がなくて実質は無関心である庶民がいるから、両者がせめぎ合いにならなかった。それで治まっていたということも言えるのかもしれないね。そういうのが国家論の背景にあるということだけは言いたいわけです。

国家というのは権力構造としか見ていない形になりますから、当然、その反発として反権力思想が定着しやすい形になる。しかも、反権力思想を持った持ち主が義民化された英雄になり得るという意識があって、天草四郎なんかもそうですし、今回の教科書問題でも、何かそんなにおいがいたしますよね。反権力思想の者が正義であるというとらまえ方は、学者の間でも、そのイデオロギーにこり固まった人たちに圧倒的に多い。

A氏 これはどうしてなんですか。私も大学の中に入ってきたら、外から見ている以上にそういうのが強くて、国家を批判することが……。

今野 自分たちの仕事だと思っている。

A氏 おっしゃるように義民。カッコいいんでしょうかね。で、国家を擁護したり、国家の立場に立つと、大学の中では多数派じゃないんですよ。明治時代からの大学と政府とのやり取りの影響ですか。

今野 あれもあるし、大学自治の解釈が、正当な解釈がされているかどうかということとも絡みますね。

A氏 文科省だけ批判すればいいけれども、国家そのものを批判していることが多いわけです。

今野 そうです。イデオロギーでいけば、国家体制としてはマルクス主義にこり固まるのが、ある意味で正当化される社会になっているということだと思うんですよ。

それはそれでいいけれど、その思想の上に乗っているのが政権野党だと思うんです。対決姿勢だけが出てしまう。政策もなければ論理もなく、対決だけが出てくるというのは、権力の奪い合いを言っているだけなんですね。

E氏 戦略の世界ではなくて、まさに戦術ですよ。

今野 戦略なき日本社会の特徴でもあるわけです。戦術は、大日本帝国陸軍・海軍、いずれもすごいんです。だけど、戦略がないわけです。

D氏 寄せ木細工ですからね。

今野 戦略がない。1,200人の連隊員を抱えて、それをどのように塹壕に座らせて鉄砲を撃つかということの論理・研究は、日本の将校（いまでも自衛隊

はそうでしょうが)は世界一流だといえます。だけど、戦略的にどこを押さえればいいのかというのが全くなかったのが、帝国陸軍であり帝国海軍だった。そのにおいを若干持っていたのは山本五十六だけだったということでしょう。「どうしてもやるなら真珠湾を先制攻撃しなくてはやれない」と、言ったというけどね。

昔から中国のことわざで、「着眼大局・着手小局」と言うんです。

A氏 囲碁みたいですね。

今野 囲碁に置きかえると、「布石大局・定石小局」ですね。小局にはたけているわけです。だけど、大局的な論議というのは、囲碁の世界でも、武宮九段が大陸風を入れ込んで非常に革命的だったでしょう。星を3つ並べていく。それは日本人は弱いわけです。それだけグローバリゼーションに揉まれてなかったのしょうね。国家意識が定着しない、枠組みがしっかりしないという中には、そういうこともあったと思いますよ。

D氏 中華思想の国家権力機構で天与のものというのは、ヨーロッパはまた別かなと。

今野 別です。

D氏 「日本の場合は」ということですか。

今野 もちろん、日本の場合です。中華思想の影響を受けて、近代国家社会論からすると、それが弊害になって出ているところが随分あるというのが私の見解です。

D氏 そうなのがいまでもベースにあるということですか。

今野 ええ。胡錦濤の日本に対する姿勢も典型的な中華思想ですよ。江沢
民だって。それを、「わかりました」といってこっちが頭下げて行くと、それ
なりに和解してくれるわけです。行かない小泉はボロクソなんです。そのと
ころを行った、ニクソン、キッシンジャーには、門戸まで開く、共産主義まで
捨てるという形になる。小泉首相は金正日のところには行ったから、拉致被害
者も何人が返してくれたという形ですね。

A氏 歴史の話に戻りますが、最近、地方に行くと、その地方の郷土史
とイイますか、歴史を探しても、失われているんですね。昭和30年代、40年代
頃は郷土史家がすごく多かったですね。そもそも日本の中で、歴史学者とい
うか、歴史家の位置づけが非常に弱くなっています。大体、一番の歴史学者は誰
かということ作家ですよ。ヨーロッパは、例えば大学における歴史学者の位置づ
けというのは非常に高いです。日本の場合は本当になくて、特に地方の大学に
行くと郷土史というのが崩壊していますね。

今野 なぜ崩壊したかということ、僕に言わせれば、いままで、地域の歴史
を言う郷土史の世界まで統治論しかなかった。殿様の歴史だけ書いてあるわけ
です。

ところが、歴史学が戦後で革命的に変わってきたのは、考古学というのが出
てきました。私の学生の頃は、考古学なんて講義にすらない領域でした。それ
が考古学というので物的証拠が出てくるわけです。したがっていまの歴史学は、
「あの当時は何を食べていた」と、考古学をベースにして言いますから、三内
丸山のあたりは革命的なことが始まったわけです。縄文時代は農業なんてなか
ったというのが引っ繰り返ったわけです。

歴史というと文学部だけど、考古学くらい理学部的なところはないんですね。
炭素から年代を測ったり、そういうことをやって初めて考古学が成り立つわけ
です。いま、それによってもものすごく変わりつつあるわけでしょう。相対的に
言うと、いわゆる統治論的歴史観、皇国史観というのはだんだん落ちてきてい

ます。その枠の中で郷土史が落ちてきているわけです。

A氏 確かにおっしゃるように、明治時代とか大正時代は、国家の中でどんな形でそこが発展したかという郷土史はあったけれども、市民が立ち上がっていないということでいくと、歴史家から見ると面白くないのでしょうかね。

今野 ええ。私は郷里にまだ人脈があるものだから、「郷土史研究会をつくったから入れ」なんて、毎年1万円取られているけれど、この間、「統治論脱却の郷土史」という論文を書いたら、殿様の名前が一つも出てこない論文を「郷土史亘理」という雑誌に載せていいのかどうかって、大もめにもめているらしいんです（笑）。

B氏 郷土史で現代史的な時間というのは、全く顧みられていないでしょう。

A氏 そうなんです。明治維新から戦前に至るところがきちっと、しかも、どこの県も大体同じ形の郷土史が、昭和30年代から40年代にかけてまとめられているんですね。

D氏 政治と産業と民族とか何か、それくらいが中心ですね。

今野 私の田舎なんか小さな城下町でしょう。初代藩主は伊達成実。そうすると、正式の奥さんの名前は系図に出てくる。そのほかに「女、女、女、女」といって、側女がみんな出てくる。その子供がみんな出てくる。二代目も出てくる。それが郷土史なんです。

A氏 歴史家にとっては、確かにあまり面白い研究対象ではないのでしょうかね。

今野 でも、そういうのに興味を持っている人がいるんですよ。それがいま、老後の楽しみで集まっているんです、月に2回か3回。郷土歴史研究旅行会なんて1泊2日で温泉に泊まってやっていますよ。

C氏 証拠みたいなものがそういう殿様関係のものしかないから、さかのぼれないとか、そういうこともあるんじゃないですか。

今野 そうです。歴史というのは文書の綴りでしょう。文書をきちっと残していたのは殿様で、庶民は残さないわけです。

B氏 教育もなかったから。

A氏 イギリスの歴史を見ると、いまだにメアリー女王だし、ときどきエドワード一世だし、ときどき人民が国王を辞めさせたり、また持ってきたり、そういういろいろなやり取りがありますから、歴史としてもやっぱり面白いですね。万世一系の天皇じゃないから。

今野 天皇家の系図くらい歴史的な嘘はないからね、世界史の中で（笑）。全然違った奴をつないで何代目とかいう話でしょう。継体天皇は全然外れた系図だったらしいね。まあ、その辺は永井路子まで書いていますよ。

ルールを戻しますが、「機能分担・役割分担型発想欠如の中央対地方」。この辺に触れて書いたのが「地域政策論探求の原点と課題」ですが、中央と地方との社会的役割と権限を明確にしないうちは地方政府の役割は出てこない。というのは、地方自治の本体に触れられなくなる。したがって、そういうことをやらないで全国計画や広域地方計画をやっているのは、また過ちを犯したり、嘘になるのではないか。こんな認識を持っています。

こうした見方をしていくと、日本の言う地方が「自治なき地方」であって、任命制の執行機関でしかないという実態が明瞭になってきます。その実態なき

地方行政というのは、したがって、実質的な政策論、施策を考えるときに計画がないんです。私も6年もいたけれども、地方自治体というのは計画が非常に弱い。ところが、地方の市町村や県は、執行能力は中央政府から見ると圧倒的にあると思います。

だから災害が起きると、3日以内に、「どこどこに被害が生じた」といって写真を添えて持ってきますよ、霞が関に。あんな機動力は地方整備局なんかありゃしない。ましてや本省しかない国土交通省国土計画局なんて、あの能力はゼロですね。で、現地の知らない理論だけになってくる。今回の総裁選挙もその気配があります。麻生さんの話を聞いていても、交付税をどう配布するかということだけが地方問題だという言い方をされていて、ひどいなあと思っているけれども、あれは永田町の論理だと思います。

地方はそうした意味で、ちゃんと位置づけられていないのです。だから、地方政府という言葉を使うに使えるわけです。ところが、英語の世界にいくと、ローカル・ガバメントとセントラル・ガバメント。

A氏 ローカルもガバメントなんですね。

今野 そうです。ナショナル・ガバメントないしはセントラル・ガバメントと、使い分けをしると聞かされました。そのかわり、ナショナル・ガバメントは何かというと、主体は外交・軍事。特に国際問題と絡めた基本問題。つまり経済産業省では通商、国土交通省では国際交通、こういう問題はセントラル・ガバメントの権限と。

そういうことを考えると、かつての建設省なんていうのは95%、内政ではないか。内政はかなり厳しい形で地方対中央で分割しなくてはならないと思うし、文科省とか厚生労働省というのも全くそうだと思います。ヨーロッパ型のソーシャルポリシーを入れた、いわゆる資本主義経済体制の中での全く新しい現代型の国家論に行けば、特に厚労省とか農林省というのは地方政府の所管なのかもしれません。つまり、軍事、外交、地球問題とあまり絡まないでしょう。小

さい政府論というのはそのところを踏まえてやらなくてはダメだと思います。

そのところの不明確さが、国土計画でも外国との絡みというと、明確につかめ切れていないのではないかという感じがいたします。

そこは、役割分担をきっちりと議論して、それに基づいて財源配分とか権限配分を持つべきであって、自治とは何か - - 地方自治体という実質的には何の権限もない執行機関である地方行政を、いかに地方政府へ深化させるかという問題を含んでいて、それを前提にして国家と地方というのを考えるべきではないかというのが哲学ですが、時間ですので、そこでやめておきます。

A氏 本来、政治家がちゃんと議論して決めなければいけないけれども、それはできませんよね。内閣でもできない。その機能を少し持っていたのは大蔵省主計局ではないかと思うんです。主計局が予算をつける中で、どういう形で予算をつけて全体の行政体系をつくっていくかという話だったと思います。

例えば、宮崎仁さんに吉田さんがインタビューされたものを見ると、宮崎さんあたりはそういう意識がありますね。社会資本を、どうやって国と地方が分担して整備していくのかという形で主計局におられた。財務省は、少しそういう意識が奪われてきた。それに代替するところがどこかあればいいわけですね。政権は変わるけど大蔵省主計局は変わらずという、昔からの考え方のあったことが一つの形を成していましたね。

今野 私もその説には賛同いたしますが、もう一面もあるわけです。それは財政の中央集権です。地方自治体の財政力は何かといたら、平たく言うと、地方交付税に依存しているだけの話でしょう。地方交付税をどれだけ分けられるかというのは大蔵省が決めることです。

C氏 港湾法自体、港務局が基本ですので。

D氏 中央と地方と、もう一つ、国民・市民社会という軸があるような。

今野 政府対市民ですね。

D氏 ええ。いまの中央政府は、一応、国民の監視というのはある程度効いていると思いますが、県や市町村に下ろせないというのは、結局、市民・県民の関心なり声が届かないというか、そこが怖いと言われている部分がありますね。その部分は、そういう議論もしなければいけないですよ。

今野 もちろんそうです。例えば、51対49だったら51に従うとかいう、政策決定についての基本が浸透していないでしょう。

D氏 分権してしまえば県民・市民の関心も深まって、うまいほうに転がる、そういうふうを考えるんですかね。

今野 いや、そんな単純じゃないでしょう。僕がコスタリカに派遣されていたとき、あの貧しい国が、我々より「この町をきれいにしよう」という意識はすごいなあと思ったのは、1カ月以内に帰ってこいという命令で行ったのですが、サンホセという首都の日本大使館にいまして、1カ月以内に仕事をするには夜寝ていられないんです。毎日毎日、徹夜して、朝5時に起きて大使館の外へ行くと、市民がみんな、自分の家の前の国道のメインストリートから何かから、ホウキを持ってきて掃くんです。これはすごいなあと思ったね。

そうすると、市役所の街路整備課とか維持課なんて要らないんです。ああいう、市民がやれることはきっちりやるということが前提になれば、中央対地方の政府論も宙に浮いた議論かもしれない。私がコスタリカへ行くときに日本の新聞がキャッキャ騒いでいたのは、松戸市がつくった「すぐやる課」ですよ。随分意識の差があるなあ。我々は先進国で、カネを持ってきたなんて威張っているけれど、向こうの市民のほうがはるかに偉いなと思いましたね。

A氏 日本みたいな形の国家の成り立ちで、それを地方分権したという歴

史が世界にあるんですか。ヨーロッパの場合、市民社会の集合体が国家であるということですね。例えば、フランスが83年に地方分権法をつくったときに、僕も実際行って聞いてきたのですが、彼らは、自分たちの集合体は国家なので、分権というのは何か預けていたものを取り戻すみたいなのところがある。日本みたいに、完全に持っていたところが、預けてもいないのにそこを分け与えるということは、イギリスもフランスもたぶんその歴史はないんじゃないですか。

今野 権力は権益につながっていますから、なかなか手放さないです。手放さないから非常に難しく、恐らく「ない」というほうが答えとしては簡単だけど、ただ、あえて言いますと、中華思想も含めて、アジアというのはコメの経済との絡みもあってこういう国・社会になっていったわけです。

その中で相対的に見たときに、香港とシンガポールと、イギリスが200年間治めたところの市民意識は中国本土と全然違います。だから、合格点になるかならないかは別として、可能性としてはあり得るのではないかという感じがします。

A氏 必要な行政サービスのあり方の問題ですけれども、1980年代に、イギリスもフランスも地方分権という大きな動きになってきました。あの大きな流れの基本的な考え方は、税金の効率性です。国家が配分するよりは、特にサービス経済化時代だし、地域にとってどんな行政サービスが必要かということのを地方で自ら考えてやったほうが、国家全体として税金の効率がよくなるということで、税金のほうから来ていますね。

今野 そうです。その根底は、そのもっと前に、社会の決断としての政策とは何かということがわかっているからだと思います。

吉田達男先生は、企画、プロジェクト、税金、政府金融、この4つをそろえて初めて「政策」だと言っているわけです。

その吉田達男先生の基本的な教えに従うと、日本の政策なんていうのは税金

とあれは財務のほうをやっていて、企画立案の分野は何も考えてもいないし、手もつけていない。それで免責されているわけです。税金と政府金融をどう動かすかというのは、財務に任せただけだからという形になっている。その後の進性があると思います。政策の中心に居るとおだてられて国土庁で計画官をやっていたときでも、大蔵省への予算要求があれほど楽な中央省庁の課長職はないですね。考えてみると、おかしいのではないかと思いますね。

A氏 昔、昭和40年代から50年代、通産省が、新政策、新政策と、いろいろな形でやっていた。通産省は事業予算ではないから、新しい策を持っていかないと受け付けてくれないから、一生懸命、新政策で世の中どうなるかと。あれは、いま思うと非常に面白かったですね。

今野 ええ。面白いと同時に、霞が関の中では、同じ中央省庁の課長をやるなら、通産省の課長だけはやらないほうがいいぞ（笑）、無責任な人間を育てるだけだと。こういう評判もあるんですよ。

A氏 では、今日はここまでということで終わらせていただきます。（了）